

# 『教行信証』を中国語で読む試み

張 偉

キーワード

教行信証・中国語（漢文）・語義

## 第一章 総序について

### 一 仏教の基本的な原理

#### —— 『教行信証』を理解する前提 ——

次に述べるような仏教の基本的な原理が、『教行信証』の背景にあり、『教行信証』を理解する前提だと思う。

#### 1 真如・自然

永遠の時間・無限な空間の中に働いている大いなる力・智慧・慈悲。

（『大無量寿経』に語られている阿弥陀仏の特徴。）

#### 2 真如の本質と現象

真如は常に二つの形として現れている。

本質——不変・形がない・目に見えない・一如・無分別

現象——生滅変化・形がある・目に見える万物・千差万別

そのような現象と本質の関係を、具象化したのは如来の法性法身と方便法身である。

#### 3 人間の心と真如

人間の心はもともと真如とともに働いていた。真如の本質と現象と共有していた。しかし、いつしか人間の心が現象（物）にとらわれて、真如の本質に迷うことになり、自我の殻を作り出し、自我執着心にとらわれ欲望的な存在になった。それは人間の無明の始まりである。仮相に目を覆われ、真実に迷うことになった。しかしそうなっても心の深いところは真如とつながっている。また真如も大いなる智慧・力・慈悲として人間の心を見守っていて常にそれを真如に帰らせる、あらためて真実に目覚めさせるように働いている。

そういうような人間の心の名付けて業識という。即ち業を生じる種というのである。（業そのものは悪いものでもなく良いものでもなく、業識が受けた影響によって決められる。

真如の働きの影響を受けて生じる業は清浄業と言い、人間を浄土にいかせる。自我執着心の働きによって生じる業は汚染業と言い人間を穢土にいかせる。）

#### 4 仏教の救済の目的と方法

目的：真如の本質・真実に目覚めさせる。教えとして実教と言う。

方法：真実を覆うものを破る。人間の心と真如との道を通らせる。教えとして権教と言う。

目的と方法は分けて言うが、実は常にともにして分かちがたいものである。目的は方法によって実現され、方法は目的を実現するのに使われる。

## 二 総序の読解

### 【一】 開頭語

『教行信証』の内在する論理性を理解するために、総序における開頭語（文章の流れの方向、と文の相互関係などを定める文の始まりの言葉）を手がかりにその構成と展開を探ってみよう。ある開頭語で始める文を一つの単位として分けると次のようになる。

#### 1 竊以、

難思弘誓度難度海大船、無礙光明破無明闇惠日。

#### 2 然則、

浄邦縁熟、調達闇世興逆害、浄業機彰、釈迦韋堤選安養。

#### 3 斯乃、

権化仁、斉救済苦悩群萌、世雄悲正欲惠逆謗闡堤。

#### 4 故知、

圓融至徳嘉号、転悪成徳正智、難信金剛信楽、除疑獲證真理也。

#### 5 爾者

凡小易修真教、愚鈍易住捷徑。大聖一代経、無如是之徳海。捨穢欣浄、迷行惑信、心昏識寡、悪重障多、特仰如来発遣、必帰最勝直道、専奉斯行、唯崇斯信。

#### 6 噫、

弘誓強縁多生叵値、真実浄信、億劫叵獲。遇獲行信、遠慶宿縁。

#### 7 若也、

此廻覆蔽疑網、更復逕歴曠劫。

#### 8 誠哉、

摂取不捨真言、超世希有正法、聞思莫遲慮。

#### 9 爰

愚禿釋親鸞、慶哉、西蕃月支聖典、東夏日城師釋、難遇今得遇、難聞已得聞。敬信真宗教・行・證、特知如来恩德深。

10 斯以

慶所聞、嘆所獲矣。

以上の語首の助詞の意味は次のようである。

1 竊以 【教行信証】全体の頭音。曲の高さを定めるもの。

竊—— (1) 私下。私自。 ひそかに。独りでに。自分だけ。

(2) 暗地里。偷偷。 こっそり。ひそかに。

以—— 思う。

竊+以—— (1) 謙虚な態度で自己の意見を述べる開頭語。

(2) 自己の内心を探る。自己の内部から自ずから生じるものを忠実に表出する。自己の深いところまで届いたので、その「自己の内心」とは、一人の親鸞の心の深い層のものでありながら、普遍的な人間の心の「内心」ともなっている。

以上の二つの意味によって【教行信証】を語る親鸞の姿勢が定められている。誠実。無造作。無装飾。謙虚。低姿勢。

2 然則

(1) (しかし。逆接)

(2) しかれば。順接。以上に論じたことを確認した上に、更にそれを論理的に展開する。

3 斯乃

以上の二文をまとめて言うならば。

4 故知

以上の三文に述べたことによって、次のことを知る。

5 爾者

以上の内容を踏まえて。

6 噫

言葉の筋が変わる。

7 若也

若は「このように」、也は「である」。若也はこのようである。

8 誠哉、

誠、誠に。哉、判断文の語尾に付き、肯定の意を強める。

9 爰

無意味。語調を調節するのに使う句首助詞。

10 斯以

これを以て。以上の理由で、……をする。

## 【二】 総序の文章構成

総序の文を漢文の文章構成の規範（起・承・転・合）に当てはめると、

### 1 起 論点を提出する。

難思弘誓度難度海大船、  
無礙光明破無明闇惠日。

### 2 承 論点を深め、展開する。

四つの文で、「層層深入（一層は前の一層を踏まえて更に次の層に深く進入する）」、「環環相扣（鎖のように一環と一環とつながっている）」という手法で、論点を展開して深めていく。

(1) 淨邦縁熱、調達闇世興逆害、淨業機彰、釈迦韋堤選安養。

(2) 権化仁、齊救濟苦惱群萌、世雄悲正欲惠逆謗闍堤。

(3) 圓融至徳嘉号、転悪成徳正智、難信金剛信樂、除疑獲證真理也。

(4) 爾者凡小易修真教、愚鈍易住捷径。大聖一代経、無如是之徳海。捨穢欣淨、迷行惑信、心昏識寡、悪重障多、特仰如来發遣、必歸最勝直道、專奉斯行、唯崇斯信。

### 3 転 言葉の筋を転じる。

「移情入理（情が理より生じ、理に情が溶け込む）」という形で、文章の流れを転じて、自ずからの感嘆を表す。

噫、弘誓強縁多生叵値、真実淨信、億劫叵獲。遇獲行信、遠慶宿縁。

若也、此廻覆蔽疑網、更復逕歴曠劫。

誠哉、摂取不捨真言、超世希有正法、聞思莫遲慮。

爰愚禿釋親鸞、慶哉、西蕃月支聖典、東夏日域師釋、難遇今得遇、難聞已得聞。敬信真宗教・行・證、特知如来恩徳深。

### 4 合 閉じる。

執筆の目的。

斯以、慶所聞、嘆所獲矣。

以上のように分類すると、総序が「層層深入」、「環環相扣」という厳密な論理性によって張り付いている世界である。その内在する論理性は総序だけでなく、『教行信証』の全体に命の血脈のように息づいている。『教行信証』が生き物のように感じられる理由はここにもあると思う。

### 【三】 对 偶

対になる文章表現を、漢文の修辞法では「対偶」という。二つの文は、字数、辞性は同じ、すなわち名詞には名詞、動詞には動詞、形容詞には形容詞が対応し、対応する言葉は互いに対極あるいは対等関係になる。

始めの四つの文は対になり、対偶という修辞法を使っている。

難思弘誓度難度海大船、  
無礙光明破無明闇惠日。

浄邦縁熱、調達闇世興逆害、  
浄業機彰、釈迦韋堤選安養。

権化仁、齊救濟苦惱群萌、  
世雄悲、正欲惠逆謗闡堤。

圓融至徳嘉号、転悪成徳正智、  
難信金剛信楽、除疑獲證真理 也。

対偶という修辞法は、表は形式的な整え、音声効果、文の美しさを求めるが、裏には文と文の相関、相対、などの対立統一関係を示す。第一文を例としてみよう。

音声効果

nansi hongshi du nandu hai da chuan  
難思 弘誓 度 難度 海 大 船  
wuai guangming po wuming an hui ri  
無礙 光明 破 無明 闇 惠 日

形式的な整え

(難思) 弘誓 (度 難度 海) 大 船  
(連体修飾語) (主語) (連体修飾語) (述語)  
無礙 光明 破 無明 闇 惠 日  
(連体修飾語) (主語) (連体修飾語) (述語)

内在する関係

弘誓は大船である。弘誓は「難思」によれば人間の計らいを超えるものである。

光明は恵日である。光明は「無礙」によれば遮るものを一切破るものである。

連体修飾語によって設定されている意味では大船の役割は、難度海を度するものである。光明の役割は無明闇を破るものである。すなわち、大船は救済の主体である。光明は救済

の障礙を排除するものである。ここで主体と助力、目的と方法という如来の二重的な働きを示している。

(父母の比喩)『教行信証』の中で名号の慈父と光明の悲母として表わされている。例えば、『真宗聖典』190頁、609頁父母因縁 479頁 347徳号 213光明(『真宗聖教全集』694頁父母因縁、486頁 616頁 158 徳号 50頁光明)

父母の比喩を踏まえて第一文は次のような如来の名号と智慧の関係と如来と衆生の関係を表わしている。

難思弘誓	度	難度海	大船
(徳号慈父)	(役割	生死流転の場)	(救済の主体 能生の因 往生させる直接の原因)
無碍	光明	破	無明闇
(光明悲母)	(役割	生死流転の状況)	(救済の方法 所生の縁 往生させる間接の原因)

漢文の文章で形式と内容が互いに活かしあうように要求されている。対偶という修辞法は、表は形式的な整のえ、音声効果、文の美しさを求めるが、ただ形式を求めるだけではなく、よりよく文と文の相関、相対などの対立統一関係を示すためである。すなわち、形式の整えと音声のリズム感は、感覚に刺激を与え、言葉のレベルにならないうちに、二つの文に内在するつながりを感じさせる。二つの文は「対」の関係に置かれ、互いに活かし合い、制約し合う。その対応する言語空間に言葉を超える豊かな意味内容が貯えられる。

総序だけでなく、『教行信証』の自釈部分の全体はほとんど対偶の手法によって構成され、わずかな不均衡も許されないほどの厳密性を保っている。また、対応関係は文と文とが対偶になるだけにあるのではなく、段落と段落、巻と巻等にも現れている。

#### 【四】 総序の言葉の読解

##### A 難思弘誓度難度 海大船

難思——不可思議。人間の計らいで考えられない。

弘誓——弘とは、大きい、力がある。弘の最初の形は「弓」である。「弓」、の真中が最も力があるというのはその漢字の始原的な意味である。日本語でそれは「ひろ」という返り点をつけられ、広いと意味づけられることになり、漢字の本来の意味からずれることになる。

## 一 弘誓の本来の意味

四弘誓—すべての菩薩に共通なる四種誓願である。菩薩は是を以て、その心を約制して、上に菩提を求め、下に衆生を救済することを願ずる。

- 1 衆生無辺誓願度。苦界の衆生が無辺無量としても、誓ってそれを救済し尽くそうとする。
- 2 煩惱無辺誓願断。煩惱は限りなしとしても、誓ってそれを断じ尽くそうとする。
- 3 法門無辺誓願知。法門無辺としても、誓ってそれを学知し尽くそうとする。
- 4 仏道無辺誓願成。仏道は至高無上としても、誓ってそれを成就しようとする。

親鸞にいおては弘誓は阿弥陀如来の四十八願であり、とりわけその中心の願、第十八願である。第十八願の主体は名号である。「難思うる誓」は名号としてとらえてよいと思う。

「そのゆへは誓願・名號とまふしてかはりたること候はず、誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も候はず候」(『真宗聖教全書』二 669 頁)

度—古代中国では、渡と通用して、「渡る」の意味に使われる。仏教用語としての「济度」は人間の生存状態を生死海に喩えるところから来るものである。济度と意味するとき、「渡」とは通用せず、「度」しか使えない。

難度海—衆生の生死流転する場。

度難度海—仏教の救済の目的：衆生を迷いから救い出す。

この文は二重の意味を持っている。

文字面の意味：阿弥陀如来の誓願は、渡りにくい海を渡する大船である。

象徴的な意味：阿弥陀如来の誓願は、衆生を生死流転している生存状態から救い出す力(主体)である。

弘誓は大船である。大船は救済の主体である。

ここで「度」という文字は、現実の海や川を渡るイメージと仏教的な济度のイメージを同時に表しうる。度は文字通りの意味と象徴的な意味の間を往復するための渡り橋になっている。異なる意味として使われても中国語での発音は共に「du」である。聞き手がこの二重の意味の間に自由に往来する道は文字そのもののなかに用意されている。

## B 無碍光明破無明闇惠日

無碍—障りなく。「無碍は有情の悪業煩惱にさへられずとなり。」(『真宗聖教全書』631 頁)

無明闇—光が見えなくなる暗黒。無明闇は現象にとらわれて、真如の本質を見失い、煩惱にとらわれる衆生の生存状態を喩えている。「明闇」とは、「明」はすなわち是れ出世なり。闇はすなわち是れ世間なり。また「明」はすなわち智明なり。闇はすなわち無明なり。『真宗聖教全集』p41・『真宗聖典』p227 参照) 惠日、智慧の太陽。「自瑩謂之光、照物謂之明(自ら輝くとは、これを光といい。物を照らすとは、これを明という。)」「一者破闇。二

者現法（一は闇を破る。二は法を現わす。）」光を遮るものを破り、光源を見せる。

文字面の意味：障りなき如来の光は、光が見えない暗闇を破る智慧の太陽である。

象徴的な意味：障りなき如来の光明は、本質を見失って無明になった衆生の心の障礙を破り、真如の本質に目覚めさせる智慧である。

この二つの文について「父母之譬喩」のところに説明がある。（『真宗聖教全集』p33・『真宗聖典』p190 参照）

それによれば、この第一文は徳号・慈父・能生の因・救済の目的の系列に相当して、救済の主体である。第二文は、光明・悲母・所生の縁・救済の機縁を与えるもの・手段・方法である。一応分けて述べられるが、働きとして、この二つは分けられないものである。常に同時に働く。大船は主体でありながら、方法でもある。光明は、闇を破り、出会うご縁を与えると同時に、光源である太陽そのものでもある。

浄邦縁熟、調達闇世興逆害

浄——清浄業。

邦——国。

浄邦——清浄業によって生じる国土、浄土。

縁——

- 1 順益資生の意。生果の作用ある法。原因となるもの、力を与えその親因を資助するもの、障礙を排除するもの。
- 2 由藉之意（『大乘義章』）。原因と条件の意。一の事象を生起するに当たってそれに関係するものを縁と名付ける。

その関係するものの中に於て因と縁とを分ける場合には、直接の原因を名付けて因といい、因を助けて果を生じる間接な原因を名付けて縁という。

父母の譬喩の中で、衆生の信心を内因と言うとき、如来の側のことを外縁というが、如来の側のものを名号と光明、すなわち救済の主体と助力、慈と悲と分けるとき、名号を「能生の因」（往生の直接の原因）、光明を「所生の縁」（往生の間接の原因）にしている。

浄邦縁熟——往生の縁が熟した。浄土に往生する条件が成熟した。

調達闇世興逆害——堤婆達多が阿闍世を唆して阿闍世が父親を害したこと。

浄業——清浄業。

浄業機——清浄業の機が彰れた。

機——本来心にある仏性の種が仏縁に出会うことによって動き始める働きである。

次の特徴がある。

## 1 微

微とは物事が変化する最初の微兆（兆候）。衆生にまさに生じようとする善があり、この善は微にして、まさに動こうとしている。仏縁に出会うと、機となることを得る。

## 2 可発

善を生じる可能性。喩えとしていえば、弩に発すべき機があるが故に、射る者はこれを発する。これを発すれば、すなわち、箭が動き、発しなければ、すなわち箭が進まない。

衆生に生じられる（可生）善があり、聖なるものがそれに応じれば、善が活かされる。

応じなければ、すなわち善が生じない。

## 3 変

転じられる可能性。（「転悪成徳」・「煩惱氷解成功徳水」・「真理一言転悪業成善業」（『真宗聖教全集』39・『真宗聖典』p198・199 参照）

## 4 機関

教えを受け入れる体・器。救済の利益を表現する場。

機と法と対にして表現するとき、能信の機（衆生の信心・「南無」）と所信の法（如来・「阿弥陀仏」）という。

機と法はもともと同根である。一滴の川水と海の関係のようである。

衆生は過去生・現在生の宿縁を異にし根性も別なり、従って救済する機としてまた千差万別なり、教えは、機に応じなければ、益にならない。故に仏は千差の便を尽くし、万別の教えを施す。

善機——悪機 定機——散機 正機——傍機 顕機——冥機 権機——実機。九品の機など。

取相分別（有相の機）から無相分別（無相の機）に達する。教えによって有相の機は無相の機に転じられる。すなわち金剛の信心を得ることになる。その金剛の信心は「絶対不二之機」である。（『真宗聖教全集』p41・『真宗聖典』p200 参照）

親鸞の眼差し：もともと微である機が清浄業の働きによってはっきり顕現することになる。「釈迦韋提選安養」は善機。定善散善の者の救済の機。「調達闍世興逆害」は悪機。悪人の救済の機。罪を犯したことをきっかけとして縁が熟して、阿闍世の救済が実現される。

王舎城の悲劇（現実）を見ている親鸞の眼差し 二つの浄は如来の働きを表わしている。如来の慈悲は、善人や悪人、それぞれの機に応じて救済の縁を与える。方便として方法は別々であるが、本願の救済の本質は一である。本願の機は、「其機者一切善悪大小凡愚。その機は一切善悪大小凡愚なり。」（『真宗聖教全集』42・『真宗聖典』203 参照）

斯乃。以上の文の意味を踏まえて、次の文が出てくる。

権化仁斉救済苦惱群萌

世雄悲正欲恵逆謗闡堤

「斉」と「正」という二つの副詞の対にも注目したい。これらは文法的に言えば虚詞である。斉は「すべて・全部」、「高さが同じ（高いのも低いもない）」を意味して、如来の「救済」の目的を「一人も捨てずに」「平等無差別に」という二重の意味に定めている。また「正」は「正しく」を意味していると同時に、日本語の「～ている」という現在時の意味も含まれていて、如来の智慧が生滅変化の現象に応じて常に動的に働いているニュアンスも表している。二つの副詞が対になり、二つの文の中で如来の働きの本質と現象の対偶関係を更に強調している。

権化は仮にしばらく化現する。仁は如来である。権化仁は釈尊が形のない真如の世界から形のある人間世界に姿を現すことを意味する。如来の救済の目的は苦惱の群萌を一人も捨てずに、平等無差別に救済することである。

世雄は如来である。悲は智慧である。欲恵は恵もうとしている。逆謗闡堤は五逆の罪を犯したものを、仏法をそしるものを、無慚無愧のものを。如来の慈悲は正しく罪悪的な人間に応じて救済を恵もうとする。

圓融至徳嘉号、転悪成徳正智、  
難信金剛信衆、除疑獲證真理 也。

圓——この漢字は、天圓を意味する。ここでは天のように全てを包容している状態、缺けるものはない、除外されるものはない、全てを包む円満を表わす。

融——漢字そのものは、物を煮て、水蒸気が上に上る状態を意味する。ここで、水と空気は、水蒸気のように交じあっているような渾然一体、調和統一、平等無碍の状態を表わす。

圓融——真如の差別・現象と真如の無差別の本質が渾然一体の状態である。一滴の水が海に戻る感覚。人間の心が阿弥陀如来の心と一になり、大いなる慈悲とともに働く状態。煩惱即菩提、生死即涅槃、衆生即如来などは、すべて圓融についての解釈である。

「速疾圓融之真言」（『真宗聖教全集』4・『真宗聖典』154参照）で、『大無量寿経』は素早く圓融になる（にする）真言だとも言い、また、『真宗聖教全集』48・『真宗聖典』211参照。大信心を「極速圓融之白道」という。大信心は素早く圓融の世界へ通じる白い道である。この大信心はどこから来るのか。次の文に「念仏往生の願よりいであり。」（『真宗聖教全集』48・『真宗聖典』211頁参照）と言われるように本願によるところである。圓融は、親鸞において人間の心と阿弥陀如来の大いなる心と一になる世界を表現する言葉である。

『真宗聖典』で「圓融」の「圓」を「円」にした。「円」という漢字は中国語の中でない。

それと似ている漢字「丹」がある。この文字の雛形は、「丹」であり、「朱砂」を意味し、象形的意味は、朱砂を取る井戸の中に一粒の朱砂がある。中国語で、「丹」は、丸い小さい粒を意味している。

すなわち【教行信証】の元来の言葉「圓融」を「円融」に訳してはいけないのではないかと思う。なぜなら、そうすると、言葉そのものが持っている深い意味と無限な広がりが消解されてしまうと言えるからである。

至徳—徳を極まる徳である。すなわち人間の計らいのレベルの善も悪も極まる徳である。これ以上はない最高の徳である。人間のあるべき全ての徳を包容しながら、人間の計らいで到達できない最高の徳である。

「圓融」と「至徳」を以て名号の連体修飾語として使われるところに親鸞の名号についてのとらえ方が伺える。すなわち名号のなかに、すべての対立するものは調和統一になり、絶対の一如になる。衆生と如来、現象と本質、善と悪、自力と他力など。

#### 転悪成徳正智

この文をイメージ化した次の言葉がある。「…煩惱の氷解けて功德の水と成る」（『真宗聖教全集』39・『真宗聖典』198頁）「弥陀智願の広海に 凡夫善悪の心水も帰入しぬればすなわちに 大悲心とぞ転ずなる」。『真宗聖教全集』p520・『真宗聖典』p504頁参照）川水は千差万別であるが、海に入ると一味になる。「凡聖所修雑修善川水」といわれるように、人間の計らいのレベルでの修行は、雑質が混ざっているもので、凡も聖も悪も善もあり、千差万別であるが、万徳の大宝海水に帰入すると、すべて本願の中に転じられ、一味になる。

「悪」という言葉は一口悪といっても、【教行信証】の中では二つの次元の二つの悪がある。

一つは善悪対立の中での「悪」である。そこに人間は善と悪の区別がある。もう一つは宿業に操られている人間の罪悪的な存在、如来の眼差しに照らされている人間の煩惱具足の存在、浄土の鏡に照らされている人間の穢土的な存在である。そこに人間全体は悪としての存在しかない。

この二つの「悪」に対するものを表わすとき、【教行信証】ではそれを区別している。前者の悪に対して言うとき、その中には「善」という漢字が使われるが、（『真宗聖教全集』41 4243・『真宗聖典』p202 p203 p205参照）後者の「悪」に対してのものは善悪の対立はないので、「一乗海」「絶対不二」（『真宗聖教全集』p41・『真宗聖典』p200参照）に表わされたように、「徳海」「徳本」「徳号」等と、「徳」という漢字が使われる。徳とは、差別する現象世界に対する真如の本質の世界である。それは悪と対立するものではなく、悪を包んで、悪を転じるものである。

「正」——普通の意味での正しいということではなく、「中道」の中である。如来の動き

による「正」、絶対に偏らない「正」である。

智——智慧である。

正智——如来の智慧、真如の本質に目覚める智慧である。

難信金剛。

難信——は人間の計らいで信じられない不思議さを表わす。

金剛——堅固、動かない。腐らない。潰されない。疑いのような雑質が混ざっていない。

信楽——衆生側のことを言っているが、見てきた通りに、信楽を生じる源は「南無阿弥陀仏」であり、本願であるので、「難信」と「金剛」で修飾する。

（凡夫＝常衆＝一如・真如。信楽についての解釈。『真宗聖教全集』444～452『真宗聖典』p407～p419参照。金剛心＝真実信心＝大悲心、信心喜ぶその人＝如来、信楽の源について、『真宗聖教全集』p444・p497『真宗聖典』p405頁・p487頁参照。大信心＝仏性＝如来 信について『真宗聖教全集』p62・p63『真宗聖教全集』p230・p231参照）

ここでの信楽は親鸞の父母の比喻の中で、衆生側のもので、信心である。それは種として真如から栄養を汲み上げ、如来の影響を受けて生じるものなので、活かされた種は金剛ほど堅固で揺るがない。「難信」と言い、すなわち人間の計らいのレベルで図ることができない。信じられないものである。

#### 除疑獲證真理

疑いを除き、悟りを得る「真理」である。

「真理」——現代語の複合語の真理という意味ではなく、「真」と「理」二つの言葉として理解すべきだと思う。真とは、真如であり、理とは事に対して、すなわち現象に対する本質を示している。仏教に「事理」という言葉がある。真如の本質と現象を表わす言葉である。

生滅変化している現象を「事」とし不変な真如の本質を名付けて「理」という。「一心二門」で言えば、「理」は「心真如門」であり、「事」は「心生滅門」である。

「理は万徳を合わせ、事は千巧を出す。事は無窮なり、理は終に一道なり」という僧肇の言葉がある。

信心と如来と衆生の関係は次の後序の文を参照。

「信順を因とし疑謗を縁とし、信楽を願力に彰わし、妙果を安養に顕さん。……」（衆生の信順（信じて従っていくこと）は種になり、疑いや誹謗など罪悪は縁になり、願力によって微である機は信楽として彰れる、信心の果は心が大きいになる慈悲とともに働くことによって顕われる。）（『真宗聖教全集』p203『真宗聖典』p400参照）

而者（以上があれば次のことが言える。）

凡小易修真教、愚鈍易往捷徑。

この言葉は二つのことを強調している。すなわち普遍性と特殊性である。念仏は人間世界の差別しされる「凡小」・「愚鈍」、誰でも修しやすい教えであり、行きやすい道であるが、ごまかすものでもなく、いい加減なものでもなく他にない、真の教えであるとのことである。

大聖一代教、無如是之徳海。

大聖——佛の別名。

大聖一代教——仏教の教である。

徳——前に見られるように人間の穢土的存在に対する如来の、「本願の徳」である。

海——親鸞において特別な意味を持っている。「転凡聖所修雑修善川水、……成本願大悲智慧真実恆砂万徳大宝海水、喩之如海也」に言われるように、念仏を以てほかの教えと優劣を比べるのでもなく、念仏を以てほかの教えを否定するのでもなく、包むのである。これは親鸞の教えの特徴でもある。すなわち名号は全てを包容する力がある。中に包まれると、悪も煩惱も解かされ、転じられることになる。(牛羊驢馬一切諸乳と獅子乳の喩の如し。【真宗聖教全集】p17 【真宗聖典】p172 参照)海という譬喩によって、名号は無限な慈悲と奥深い智慧、大いなる包容力を持っていてすべての仏教の教えを包んでいる、海はすべての川を受け入れるようである。そういうニュアンスが海という言葉に潜んでいる。

徳海——すべての徳を包む本願の世界である。そこに善と悪、他力と自力、専修と雑修という二元対立が解かされることになる。

捨穢忻浄、迷行惑信、心昏識寡、悪重障多、特仰如来発遣、必帰最勝直道、専奉此行、唯崇斯信。

捨穢忻浄——穢土を捨て浄土を切望する者(自我執着心にとらわれる人生を汚れた国として厭い、阿弥陀如来の世界を清浄の国として切望する)。忻と欣、現代語で通用する。古代では忻は「心之開發」の意である。欣、笑喜也。欠は、口の形の変化と関係する意味を表す字である。喜ぶとき口を開けて笑うとのことである。

迷行惑信——行に迷い、信に惑う者。行と信とは、普通の修行と信じるレベルのものではなく、【教行信証】の「行と信」である。すなわち真如の本質を見失い、真如の本質に惑うとのことである。

心昏識寡——心が迷い、識が小さく、狭くなった者。寡は、一家。頁一頭と刀に分けられる。すなわち、家を人数によって分けるとの意味である。もともとあるものが分けられて小さくなるという。識が心である。真如の本質を見失った心がともとの大きさ広さを失ったとの意味。

悪重障多——悪が重い、障りが多い者。悪は宿業の歴史の中に積み重なってくる悪であるので、重は常識的に感じられる重さをはるかに超えている意味あいである。障は、仏教

仏用語の覆蔽、障疑の意味である。真如の本質に覚さめることを遮ぎるものを意味する。心が真如の本質から隔てられて、超えられない障りがたくさんあることを意味する。

いくつかの人間のタイプを上げているようであるが、実は人間存在の本質を示しているのである。すべての人間が内包されている。それは「二河白道」の中での人間の姿である。

特仰如来発遣——特は「ことに」と返り点をつけられたので、日本語で殊に、異にという意味になる。漢字のままならば、特此（まずは）、特地（わざわざ）という意味もある。

特別な人間が如来の発遣を受けるとの意味ではなく、すべての人はまずは、わざわざの如来の発遣を受けるとのことである。

必帰最勝直道——必ず最勝の、最も近い白道に帰するに違いない。

専奉此行、唯崇斯信——「専」と「唯」は、このほかにないという意味である。行は念仏の行、信は、信心の念仏である。人間の意志によってこの行、この信だけ選ぶべしという意味ではなく、二河白道に示されたように、否応なしに、此行を奉じる、斯信を崇めるほかに、道はないという人間がおかれている厳しい状況を示している。「奉じる」と「崇める（あがめ）」という動詞は、日本語として主体の意志を示すニュアンスがあるが、漢字は両方共、いただくという意味があり、人間の計らいを超えた大いなるものの存在が言葉の裏に潜んでいる。すなわち、この行、この信はいただいたものであり、それを大事にする気持ちが込められている。

「而者」によって引き出されたこの一段落は、「承上啓下」という過渡的な役割になる。

前半の理性的な論述から後半の感情的な述懐への過渡である。

噫、賛嘆、悲嘆の感嘆詞である。次の感情に賛と悲が込められている。

弘誓強縁多生叵値、真実浄信億劫叵獲。遇獲行信遠慶宿縁。

弘誓——第十八願、名号である。

強縁——

この言葉は背景が深い。天親は『俱舍論』の中で因と縁について論じる際に、因を六種類、縁を四種類にしている。その中で真如の本質のレベルの因を「能作因」、縁を「増上縁」と名付ける。能作因は、諸法が生じようとするとき、ほかのものに妨害されずに、生じさせる根元的な因である。増上縁は、それが成長させる力を与える根元的な縁である。二者表裏一になって真如の本質的な力を顕す時、増上縁という。「無障」と「与力」はその特徴を示す言葉である。「能作因」は、「無障」と言い、「増上縁」は「与力」という。人間を救済する際にその力は宿業から人間を救い出すように働く。「滅罪」と「証生」という働きである。例えば信心が生じようとするとき、宿業に飲み込まれないように信心を守護し、それをして信心として生じ、信心として成長していく因と縁は、増上縁である。イメージとして現れているのは、二河白道での発遣する釈尊と招喚する阿弥陀如来である。

親鸞はそういうレベルで、「弘誓」の力をとらえているので、「強縁」とは普通の強いと

いう意味だけではなく、人間救済の根元的な力を意味していると思う。(それについて詳しく論じるところは、『真宗聖教全集』p40『真宗聖典』p201 参照)

多生——

この言葉は宿業を前提としている。生死流転している無数の生という意味である。

叵——字形も発音も「可」の否定である。発音は、PO で、不可 (BUKE) の合音である。字形は可を反対にするものである。不可能を意味する。二つの「叵」は名号に出会うこと、信心を得ることのありがたさを、難しいというよりただ一回しかない機会として表している。値はありがたく遇う。

真実——真如の本質のレベルの真実である。浄信は清浄業によって生じる信心である。億劫は仏教の時間単位を表す言葉である。大時、刹那に対して数え切れない時間を意味する。

億劫——もともと数え切れない時間単位である。劫にさらに億を加え、時間の無限の上に長さという感覚を強めている。ここに親鸞の仏教的な人生観が自然に流露している。すなわち、一回限りの人生、生によって始まり、死によって終わるという常識的な人生感覚と異なり、人生を永遠無限な宿業の歴史の中においてとらえている。

叵——同前。

獲——得る。

遇獲行信遠慶宿縁

遇獲——恵まれて得た。前の内容を踏まえて、ただ一回だけの機会を得たという意味である。それは漫漫たる宿業の歴史の中に積み重なってきた縁に恵まれたもので、それを感謝してありがたくいただくと言う気持ちが「遇獲」という言葉に込められている。

行信——念仏の行と信樂。

遠慶宿縁——漫漫たる宿業の歴史を背景にして、「遠」と「宿」という文字を使っている。慶は、「祝う」と「喜ぶ」という二重意味を含んでいる。

若也、此廻覆蔽疑網、更復逕歴曠（空・絶）劫。

若也——「若」は多美的な文字である。日本語の「もし」という意味もあるが、後に「也」がついていると、「このようである」を意味する。

此廻——このたび。「廻」を使い、一回の回だけではなく、遠い道の意味を含んで、輪廻の意味を裏づけている。

疑網——疑いの網。

覆蔽——網のようなものに覆われる。

更復——更にまたは。

逕歴——経を使わずに逕を使うことに味がある。逕は経過という意味であるが、互という部首によって、巡らす、遠い道の意味を帯び、生死流転という六道の中を巡る感覚を持ってくる。

曠——空・絶。

劫——時間単位。曠劫は時間を絶する意味になる。すなわちせつかくの機会を見逃すならば、永遠に生死流転していくとのことである。この機会は二度と得ることはあるはずもない。

誠哉、摂取不捨真言、超世希有正法、聞思莫遲慮。

誠哉——誠に。

真言——真とは、真仮という対立のレベルの真ではなく、現象世界に対しての真如の本質である。言は名号である。真言とは真如の大いなる慈悲・智慧・力を持っている阿弥陀如来の名号である。そのような名号は、すべての念仏者を摂め取ってお捨てはならない。

正法——真如の本質を示す法である。「理無差別謂之正」

超世——世間を超える。現象世界を超える真如の本質。

希有——希な。その前に「超世」という言葉があるので、世の中に希なという意味ではなく、この世を超える希なという意味になる。

聞思莫遲慮

遲慮——彷徨う。のろのろと決定しない。

莫は否定を表わす言葉であるが、第二人称に限定されている。すなわち、相手を前にして「君は……しないでください」との意味である。すなわち、語り手は聞き手に語りかける口調である。『教行信証』の語り手は親鸞であるが、聞き手は誰であろう。次にそれがすぐ出てくるが、『教行信証』にたびたび呼ばれる者でもある。それは「愚禿積親鸞」である。すなわち語り手も親鸞、聞き手も親鸞である。親鸞は聞き手として自己である「親鸞」を設定している。それは普通の文章表現ではいへば、自己内心の独白、自己告白的な書き方である。しかし、『教行信証』は決してそういうレベルのものではない。親鸞はすべての衆生の中での一人の生身の親鸞として実人生の感覚を持ちながら、すべての衆生を包んでいる普遍的な人間存在を身をもってとらえているのである。一人の生身の人間として会得した普遍的な人間存在の真理をすべての人と共有する気持ちで語っているであろう。であるから、『教行信証』の言葉は一人一人の人間の心を打ちながら、個人的な民族的な時代的な枠を超えて、すべての人に共鳴を与える力を持っている。

聞思——名号を聴聞し教えをいただく（名号は声として耳から入り、教えは理として頭に入る。）

莫遲慮——疑ったり、彷徨ったりすることのないように。

爰愚禿積親鸞、慶哉、西蕃月支聖典、東夏日域師積、難遇今得遇、難聞已得聞。敬信真宗教行証、特知如来恩徳深。斯以、慶所聞、嘆所獲矣。

「愚禿積親鸞」という自己の名前を呼ぶことは感情のうねりの峰を表している。それは親鸞の感情の真実に流露したことで、文の流れとして無造作で、自ずからそうなったと感じ

られる。それであればこそ、今まで論じて嘆じてきたものは生身の人間の実人生の感覚として読み手に与え、感覚的な共鳴を呼び起こすものになる。

西蕃——インド。

月支——中国西部地域に古代、月支国があった。

聖典——仏教の教え。

東夏——中国。古代中国東部を東夏という。

日域——日本。

師釈——釈尊の教えについての解釈。膨大な仏教の思想体系は、釈尊の教えについての解釈によって構成されたのである。

難遇今得遇、難聞己得聞

遇いがたきものに今遇うことに恵まれた。聞きたいが今聞くことに恵まれた。得という漢字は、幸いにいただくという感情を含んでいる。

敬信真宗教行証

真宗——言葉の意味を追求したところから言えば、今のような個有名詞としての浄土真宗の意味ではなく、真の宗という意味である。宗は仏教用語として二重意味をもっています。一つは真諦を意味する。もう一つは、「諸経宗趣各異」という意味で一經の主旨を意味する。真とは、真如。敬信真宗教行証とは真如の本質（法性法身に示されるもの）のレベルの真諦を示す教と行と証を敬（うやま）い信じる。ここでタイトル『教行信証』の教、行、信、証の関係も示している。すなわち四者は並列関係ではなく、信は教、行、信、証を貫くものである。真宗の教、行、証を敬信する。

特知如来恩徳深

特——連詞として、前の理由があれば次のようになるという意味を持っている。真宗の教、行、証を敬信することによって、真如の本質を教えてくださいましたことに如来の恩徳の深さを思い知ることになる。それこそ如来しか教えられないものである。

斯以慶所聞、嘆所獲矣。

斯以——斯を理由として。「斯」に、総序全体を納めている。聞くこと（名号）をありがたくよろこび、獲たこと（信心）を嘆ずる。

この文によって『教行信証』が何のために書かれたのかを明らかにしている。すなわち、名号に恵まれて、信心を得ることを慶び、賛嘆するのである。